

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-753-3013

戦争当時国アメリカと図書館界

龍谷大学経済学部事務室

村上美代治

1. はじめに

イラクのクウェート侵略・併合に始まった一連の動きは最悪のパターンである戦争という形で幕を閉じ、イラクは侵略・併合の無効、賠償責任などを決めた一連の国連安保理の決議受諾により元の鞘に戻った。

世界の人々の願いも空しく戦争が強行され、平和で安全な暮らしをしていた人々を地獄に引きずり込むとともに原油の流出や油田の炎上など環境破壊もされたのであった。いやしくも、先進諸国の武器、設備でもって、多国籍軍とイラク軍との両者が戦う運命になったし、毒ガス、核兵器の使用も公然と表明されたのであった。武器輸出という愚かな行為が多く、貴重な人命を失わせしめる結果となった。ペーカー米国务長官は「われわれはまた、正義の戦争を正義の方法で遂行するために最善を尽くしている。われわれの目標は軍事施設である。われわれは民間人の死傷者を最小限にとどめ、宗教的、文化的遺跡の破壊を避けるために可能なあらゆることをおこなっている。」⁽¹⁾と証言しているが、現実には多くの民間人が殺傷され、文化、社会、生活基盤がことごとく破壊されたのであった。如何なる理由であれ戦争の正当化は許されない。

本稿では、アメリカ国民が国内の状況、特に国内の社会的矛盾の激化と景気後退から、また愛国主義復活と反戦活動との側面から戦争をどのように捕らえていたかを見るとともに、アメリカ図書館界の対応について理解することとする。

2. アメリカ国内の反応

湾岸危機以後、アメリカ国内至るところで黄色いリボンがつけられていた。大衆文化と商業主義の結合したものとして誕生した黄色いリボンは、反戦デモに参加した人々の中にもつけていた人が多かったことや教会の中には「黄色いリボンが、兵士の安全を祈る印で

あるのならかまわないが、それが人殺しを支持する印であれば、良心が許さない」としながらも認めていたりしている。(2)

ところで、湾岸戦争に対するアメリカの真の反応は何だったのだろうか。アメリカ人の支持するバックグラウンドについて以下のよう

に述べている。(3)「ベトナム戦争以来、多民族化、社会の価値観の多様化、ベトナムやウオータゲートの傷などで米国の求心力が弱くなっていたが、この戦争で誇りを取り戻した」(岡本行夫)、「いまのアメリカでは、湾岸戦争に反対の意見をいうのは、とてもむずかしい空気になっていること、われわれの隣人や、その息子や父親が、いま戦場で戦っているわけで、・・・」(アリス・T・マーリン)や「今度の戦争は志願兵ばかりではない。奨学金をとるために予備役に登録していた人もたくさんいるんです。アメリカ人はこういう人たちが、早く帰って来られるように、サダムを潰さなきゃって思っているんです。決して旗を振ってブッシュに賛成しているわけではないんですよ。」(ドウス昌代)

経済問題も現在のアメリカの複雑さの一面を覗かせている。すなわち、アメリカ経済が平時として最も長かった景気拡大に終止符を打つことになったことである。確かに8年間持続した景気も湾岸危機頃から下降局面を迎え、戦争終了と同時に国内問題が改めて浮上してきたことである。中本悟は「市場経済を至上のものとし、市場経済による効率性を説くシカゴ学派に支えられ、つぎつぎと従来の規制緩和を行ったこのレーガンミックス型市場経済主義は一80年代を席卷した一破綻したことを意味する」(4)と分析している。佐藤定幸も同一の視点から(5)、「湾岸戦争の最高潮時にもアメリカ国民の多くが湾岸戦争に反対し、アメリカが戦うべき戦場はクウイートやイラクの砂漠ではなくアメリカ国内であり、アメリカの貧困や所得配分の不公正と戦うべきだ、と叫んでいた」「アメリカの総人口に占める比率よりもはるかに高率の黒人が軍隊にはいり、それよりもさらに高い比率の黒人が中東に派遣されていたという事実一かれらを駆り立てたのは愛国心ではなく貧困であり失業であるという事実」と述べている。統計的にも「不平等は歴史的水準に達している。略

現時点で、推計200-300万人のアメリカ人がホームレスであり、2000万-3000万人の成人が職務適格上の無学文盲であり、3200万人が貧困線以下で生活しており、3200万人が公私いずれの形態での健康保険からも除外されている。」(6)という現実がある。アメリカの財政赤字、貿易赤字に加えて、富と所得の配分における不平等と消費の減退、社会的安全装置である各種の給付制度の機能欠如という状況がある。平井則之は「賃金上昇率の低下」「高い失業率」「富者への減税」で「富裕の中での貧困の拡大」

を説明している。(7)

アメリカ世論が湾岸戦争突入と同時にブッシュ大統領支持に向かったのは、強いアメリカ外交、軍事、ハイテク兵器など世界のリーダーとしてのアメリカの再確認や戦争被害者が国内では僅かであったことによる。そのことはブッシュ大統領の支持率が戦争勝利直後の3月初めの90%から78%に急落していることがなにより証拠であろう。(8) 2月24日の記事もそのことを裏付けている(9)。愛国心の誕生は現在の社会を反映した形で復活してきているのである。

このことは、反戦運動を全国に波及させなかった要因にもなった。反戦集会は全米主要都市で展開されており、特に10月20日、11月19日、11月26日には大規模のデモ・集会が行われたことが報道されているが、全国に拡大しなかった。その中で反戦の声が湾岸で戦っている兵士の家族から出始めたことは注目すべきであろう。「軍人家族を支持するネットワーク」(Military Family Support Network)が設立され、会員数が6000人に達したことが報告されている。(10)

しかしながら、アメリカ政府や軍部による的確な攻撃の放映や情報検閲の巧妙さが先にも記したように反戦運動にも微妙な影響を与えたと言える。8月10日からのアメリカの「国防総省国家メディア・プール」の機能、CNNテレビのピーター・アーネット特派員のイラクからの報道を反愛国的行為として糾弾する声はアメリカ人の多くが戦争報道規制を強化すべきであるとの調査結果とは無関係ではない。(11) 反戦運動も次第に非愛国的な運動に見られないように配慮した形で行われたと記されている。戦争容認とアメリカ兵士の安全が天秤にかけられて戦争支持に回ったといえる。カリフォルニア大学バークレー校のスメルザー教授は反戦運動が盛り上がらなかった原因として、(1)イラクを悪魔と見なし、国民が交戦的になったこと、(2)ベトナム戦争後遺症の払拭、(3)反戦運動の中心だったユダヤ系アメリカ人の動向の3点をあげている。(12)

3. アメリカ図書館界の動向と反応

アメリカ国内の状況のなかで図書館界は如何なる反応をしていったのだろうかとの素朴な疑問が出されよう。戦争支持一色に包まれたアメリカで図書館は大変な困難に直面したであろうことが想像される。アメリカ図書館協会は1939年の図書館憲章を採択して以来、幾度もの改訂やマニュアルの作成、教育、組織の整備などをしてきており、その背景には図書館への各種各様の圧力の排除や社会的要求への対応のなかで職業倫理や思想に裏付けられた権利を守るという苦難の路でもあったのである。戦争、人種、性、公民権運動など社会的、政治的局面にあって、常にアメリカ憲法の修正第1条

(信教・原論・出版・集会の自由・誓願権)とこの憲章を依りどころにして図書館・図書館員のステイサスを守ってきた歴史でもある。

アメリカの図書館にインターンとして滞在しておられた小野さんは、女性図書館員が軍に召集されたことやキャンパス内での反戦運動の状況を報告している。また、図書館界の動向については、アメリカ図書館協会からの資料、関連雑誌でもって紹介する。

アメリカ政府の出版物や情報資料に関するイラク、クウェートとの貿易禁輸の措置に抗して、議会図書館は8月17日にその取り消しを求めている。なぜなら、この措置によってイラク、クウェートの図書館や出版社との情報交換や共同プロジェクトの停止され、国家安全にとって危機的状況になるからである。⁽¹³⁾ また、図書館員もモラルの観点から政府に対して抗議している。「ライブラリアンシップにおける社会的に責任ある専門家として、軍隊は自国に戻るべきである」との声明を出しているPLG (the Progressive Librarians Guild) はアメリカ主要都市で開催された反戦集会にも参加している。その他にもアメリカ図書館協会内のアメリカ知的自由委員会、国際関係委員会、社会的責任に関するラウンド・テーブル (Social Responsibilities Round Table: S R R T) も独自の声明や行動でもってこの問題に対処してきた。

アメリカ図書館協会の評議会は1991年の冬期大会(シカゴ、1991年1月11-17日 参加者8567人)にてイラクのクウェート侵略、国連の対応に関する決議文を通過させた。その内容は”the American Library Association condemn both the Iraqi invasion of Kuwait and U.N. and U.S. military response and urge a diplomatic and peaceful settlement of this crisis. Copies of the motion should be sent to the President of the U.S., the Congress, the Iraqi Embassy in Washington and the United Nations' Secretary General”となっており、非難と平和的解決を求めた文書になっている。評議会はまた「国防省は戦取材のジャーナリストへの新たな取材制限を解除すべきである、出版物や他の情報資料はイラクやクウェートへの経済制裁から取り除かれるべきである」と決議している。更に、知的自由委員会は湾岸戦争に関する多くの決議文を採択した。⁽¹⁴⁾ また、第1次、第2次世界大戦にてアメリカ図書館協会が果たしたように、湾岸地域に駐留している兵士への図書資料送付のためのキャンペーンはおこなっていないことが伝えられている。国内の異常な雰囲気の中で、図書館員としての独自のスタンスを持ち続けている状況が一連の決議行動からも判明できよう。

参考に『アメリカ図書館協会方針マニュアル』の「立場声明と一般向け方針声明」を紹介しておく。⁽¹⁵⁾ 「核兵器凍結」など問題は

なくはないが、資料提供という立場を鮮明に表しているものとして見ておく必要がある。

50. 12 軍縮に関する情報など

図書館は、軍縮および対立の解決を可能にする情報を提供したり、そうした情報を容易に入手できるようにするべきである。

50. 13 核兵器凍結など

アメリカ図書館協会は、核兵器凍結の考えを支持する。そして、核時代の国家安全、核軍備、軍縮運動などについて、図書館が均衡ある最新の図書館資料を提供するよう主張する。さらに、こうした問題に住民の目を向けさせ、多様な問題と情報を提供するように求める。

各図書館では湾岸戦争関連資料の貸出増加や電話によるレファレンス増加の報告がなされている一方⁽¹⁶⁾、図書館員が予備兵として召集され、図書館、図書館員ともどもこの戦争の影響を強くうけていることが報告されている。⁽¹⁷⁾一方、前線に対しては個々の図書館で貢献策が検討されたが、その実態については掘みきれていない。しかしながら、「the Army Library Community, Family, and Support Center (CFSC)」によって一定の条件のもとに多くの図書、ビデオ、カセットテープが送られている。前線への資料の寄付や寄贈の形で図書館、出版社、著者などから送られてきていることや多くの女性兵士のために前線部隊に女性用の読物が送られていることも報告されている。

5. おわりに

力に依存した形で国際政治が進められるならば、再び世界各地で戦火が発生する可能性をはらんでいる。湾岸戦争は軍事力による衝突であり、強いものを勝者にしてしまっただけであった。人々の願いを無視して強行された戦争に抗し、秩序ある平和と安全な世界に向けた世界戦略を構築することが必要である。

湾岸戦争によって舞台となったイラク、クウェートでは、人類の知的遺産である図書資料の被害も甚大であることが報告されている。一方、アメリカ国内では、国民の大多数が戦争を支持しているなかで、図書館員としてのモラルと倫理に基づき独自の行動を取っている。アメリカ図書館協会の一連の決議は積極的に社会に貢献寄与するために、進取的に図書館理念を打ち出したものであり、図書館の存在意義を実証したと言える。今回は個々の図書館での実態は掌握できなかったが、アメリカ図書館協会の決議によって図書館員に自戒を促しているように捉えることができよう。日本でも如何なることが国民への奉仕になるのかをアメリカとの対比で一度考察してみることが必要ではないか考える。基本的人権の擁護こそ図書館員の使命であると考え。

引用文献

- (1) 「アメリカは湾岸の安定と安全を追求する(上)
—1991年2月6日 ベーカー米務長官の下院外交委員会での証言— 世界政治 832 1991 p25
- (2) 舟橋洋一 「アメリカの聖戦と新世界秩序」 『世界』
554 1991 p20
- (3) 「緊急特集・大詰めの地上戦—「アメリカの正義」とは?—」
『朝日ジャーナル』 33(10) 1991
- (4) 中本 悟 「《特集 不況深まるアメリカ経済》
「アメリカの経済破綻と銀行の経営破綻—レーガ
ノミックス型市場経済主義の帰結」 『経済』
323 1991 p30
- (5) 佐藤定幸 「湾岸戦争後のアメリカ経済」 『経済』
325 1991 p77
- (6) J・コーン、J・ロジャーズ 「《特集 米国の冷戦後新戦
略を探る》 中間選挙が示した米国社会の拡散と
不満 『エコノミスト』 68(51)
1990 p52
- (7) 平井則之 「《特集 不況深まるアメリカ経済》
スタグフレーションの再燃か—深刻な湾岸戦争長
期化の影響—」 『経済』 323 1991
p14-15
- (8) 「90%→78% 支持率にもじわり影」
『朝日新聞』 91 4/13
- (9) 「米世論は大統領支持 「犠牲」拡大なら変化も 湾岸戦争
地上戦突入」 『朝日新聞』 91 2/24
- (10) 米谷ふみ子 「海兵隊の息子が殺されたら、ブッシュ、あ
なたを許さない—軍人の家族も声を上げはじめた」
『朝日ジャーナル』 33(10) 1991
p90
- (11) 中嶋弓子 「報道管制を好んだアメリカの世論—湾岸戦争
は、日米の戦後に何をもたらしたか(上)」
『世界』 554 1991
- (12) 中島鉄郎 「湾岸「大勝利」とアメリカ
—バークレーから消えた反戦の熱気—」
『朝日ジャーナル』 33(19) 1991
p16
- (13) Quinn, Judy & Rogers, Michael
「Iraq conflict creates library concerns」
『Library journal』 115(21) 1990
- (14) 入手した決議文は下記の4点である。
 - (1) RESOLUTION ON THE UNITED NATIONS EMBARGO IMPOSED
ON IRAQ AND KUWAIT
 - (2) RESOLUTION ON THE UNITED STATES EMBARGO IMPOSED
ON IRAQ AND KUWAIT
 - (3) RESOLUTION ON PENTAGON PRESS CORPS POLICIES
 - (4) RESOLUTION ON FBI INTIMIDATION OF ARAB-AMERICANS

- (15) アメリカ図書館協会知的自由部編纂 川崎良孝、川崎
佳代子訳 『図書館の原則(図書館と自由 第12集)』
日本図書館協会 1991 p313-314
- (16) 「What is Saddam's sign?」 『American libraries』
22(3) 1991 p191
- (17) Barrera, Brenda J. 「Libraries and librarians
respond to the Persian Gulf crisis」
『American libraries』 21(10) 1990

参考文献

- (1) 「1991年米大統領一般教書」
『世界政治』 831 1991
- (2) 加藤陸夫 「湾岸事情と世界経済情勢の焦点」
『経済』 324 1991
- (3) 高榎 堯 「隠された核戦争」
『世界』 554 1991
- (4) 新原昭治 「湾岸戦争と大量殺りく兵器」
『世界政治』 833 1991
- (5) 末浪靖司 「《特集 湾岸戦争—世界と日本》
平和のために何をすべきか」
『文化評論』 363 1991
- (6) 末浪靖司 「軍事同盟の変質と歴史の岐路」
『文化評論』 359 1991
- (7) 入江 昭 「愛国主義の背後にあるもの
(統 米国通信 第11回)」
『世界』 554 1991
- (8) 矢部 武 「《特集 湾岸危機、反戦・非戦からの視点》
「オレたちは中東へは行かない—第二のベトナム、中東
戦争阻止に立ち上がる米国人—」
『エコノミスト』 68(47) 1990
- (9) 小野正夫 「アメリカでは今……(In American now)」
『大学の図書館』 10(5) 1991
- (10) 「At midwinter, an imminent war taught librarians
what's important」 『American libraries』
22(3) 1991
- (11) 「Shadows of war loom over Chicago」
『American libraires』 22(2) 1991
- (12) 「ALA council condemns war with Iraq」
『Library journal』 116(3) 1991
- (13) 「War is a library issue」
『Library journal』 116(4) 1991

駆け出しライブラリアンのぶろーくんエッセイ(2)

図書館の「ハレ」を演出してみたくなった!

京都橘女子大学図書館 小川晋司

本学の図書館の建物は、本学の他の建物と比べてはるかにゆとりをもった構造となっている。いわゆる贅沢な建物と云ってよいと思う。その空間的ゆとりを象徴しているのが、メインカウンター(2F)前にある吹き抜けであろう。ブラウジング・コーナーと名付けられたこの空間は3Fの天井が光天井になっており、普段はお日さまの機嫌によって読書をするのに程よい明るさとなったり、居眠りにもってこいの薄暗さになったりする。

僕は、カウンターの前にあるこの空間が気になって仕方がなかった。それはまるで、どこかの神社の社のように思えてならないのだ。社という空間は、普段は何もないただの空間である。そのただの空間が、年に一度しかないまれびと(神様)の来訪を祝って祭りを行なう時のために大切にしまわれている。その間、そのただの空間は、「ケ」というある種の演出のもとに、おごそかに存在しつづける。

「ハレ」である祭りの間、人々は社のまわりに集い、まれびとへの奉納の行事をしたり、唄ったり踊ったりして、交流を深める。社は、この国の「場の文化」の真ん中であって人々をいざなってきたのではないか?

ちょうど図書館の中央に位置するこのブラウジング・コーナーという空間は、図書館という「場の文化」(—そこには人間と書物が時間という制限を超えて語り合う場がある・・・)の「ハレ」を表現するのに最適ではないか。などと、思っている



うちに、頭のなかではこの空間をどういうふうに料理してやろうかと、イメージが膨らんでいく。

すると、今まで大人しく書架に腰掛けていた「神様たち」が、あたかも社に向けて呼び降ろされるように集まってくるのが見える。

普段、くつろぎや、居眠りのために控えめな光のもとにあったこの空間は、「ハレ」にふさわしいショウ・アップされた空間として演出されたのである。

今年が初めてのこの企画は『BRITAIN TODAY』
☎ (日本ではなく英国を紹介する企画)となって実現した。